

瑜伽行派の空性と実践 : [附録]  
Mahāyānasūtrā lankāra 梵文字写本対照表

阿, 理生

<https://doi.org/10.15017/2328576>

---

出版情報 : 哲學年報. 43, pp.55-90, 1984-02-15. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 瑜伽行派の空性と実践

〔附録〕 Mahāyānasūtrālaṅkāra 梵文写本対照表

阿 理 生

## 1

すでに初期仏教において、解脱の境地として、空・無相が表明されているが、大乘仏教に至る仏教史において、空・無相は、何らかの形で常に、解脱に関わる基本的な実践に深い関連を有してきた極めて重要な概念である。

その意味で、仏教史における空性説の解明は、仏教の思想と実践の本質的な解明にも連なるものである。

本稿では、問題点の多い瑜伽行派の空性説について若干の考察を試みたいと思う。

## 2

瑜伽行派の空性説については、これまでにいくつかの研究が発表されている<sup>(1)</sup>が、ここでは、『瑜伽師地論菩薩地』(Bodhisattvabhūmi)に示された空性説を手掛かりに、瑜伽行派の空性説の性格・構造やその成立の背景等について再検討してみたいと思う。

『菩薩地』の空性説は、その真実義章(Tattvārtha-pāṭala)の中の、悪取空性(durgrhītā śūnyatā)を批判して善取空性(sugrhitā śūnyatā)を説き明かす箇所<sup>(2)</sup>に最も明瞭に示されている。その箇所とは、すなわち、

「また、どのように空性は悪しく把握されるのか。ある沙門あるいはバラモンは、その点で(yena)空であるところのそれ(tad)を無とみなし、空なるもの(yad)それ(tad)も無とみなす。この空性は、このように悪

しく把握されると言われる。どうしてか。なぜなら、その点で空であるところのそれは非有であるから、しかも空なるものそれは実有であるから、空性が妥当であろう。そして、一切が無であるならば、どこに、何が、何の点で空であろうか。また、その点でその同じものが空であることは妥当でない。それゆえに、以上のように空性は悪しく把握される。

また、どのように空性はよく把握されるのか。それ [B] (yad) がそこ [A] に (yatra) 無いとき、後者 [A] (tad) は前者 [B] の点で (tena) 空であると正観し、さらに、そこ [A] に (atra) 残っている (avaśiṣṭa) もの、それ [C] はここに実在していると如実に知る。これが、如実な無転倒の、空性への悟入である。それは例えば、色等と名づけられるすでに説かれたような事 (vastu) には、色というかくの如き等の仮説から成る法は無い。これゆえに、その色等と名づけられる事は、その、色というかくの如き等の<sup>(3)</sup>仮説の自体の点で空である。さらに、その色等と名づけられる事に何が残っているか。すなわち、まさにその色というかくの如き等の仮説の依り所 (prajñaptivādāśraya) である。そして、この二つを如実に知る。すなわち、事のみが存在している (vastumātram ca vidyamānam) ことと、事のみの上に仮説のみがある (vastumātre ca prajñaptimātram) ことを。」

上記引用文中に下線を施した部分の文句は、諸種の経論に見出される、空性説に関する定型的表現であるが、つとに長尾博士により、『中辺分別論』世親釈における同表現をもとに、ほとんど同じ文句が『菩薩地』（上記引用）、『究竟一乘宝性論』に現われ、『顕揚聖教論』にも同内容が偈の形にまとめられていること、及び、その表現が Majjhima-Nikāya の『小空経』（Cūlasuññatasutta）に由来するであろうことが指摘され検討がなされた。<sup>(4)</sup>その後、向井氏によって、その定型的表現が、長尾博士の指摘の他に、『瑜伽論撰事分』、『阿毘達磨集論』、『瑜伽論』三摩呬多地、『楞伽经』一定型的表現の前半句のみ）にも見出されること、及び、その定型的表現が、パーリ『小空経』よりもチベット訳『小空経』によりいっそう一致することが指摘さ

れ、また、その定型的表現の正しい読み方が呈示された。<sup>(5)</sup>

『菩薩地』を始めとして広く瑜伽行派の諸論書に、『小空経』に由来すると考えられる空性の定型的表現が見出され、しかも、それが瑜伽行派の空性説の特徴を端的に示しているという事実は、瑜伽行派の空性説が、基本的には、実は般若経類の空性説の継承ないしはその展開という性格のものではなく、むしろ『小空経』に見られるような初期仏教の空観の伝統を背景にして成立していることを物語っている。<sup>(6)</sup> Candrakīrti(月称)の『五蘊論』に、中観派の空性説の立場から、『小空経』の空性の定型的表現とともに『菩薩地』を始めとする瑜伽行派の空性説が非難の対象とされていることは、<sup>(7)</sup>その間の事情をよく反映しているものと言うことができよう。

『小空経』<sup>(8)</sup>に由来すると考えられるその空性の定型的表現、すなわち、「[B] が [A] に無いとき、[A] は [B] の点で空であると正観し、さらに [A] に残っている [C] はここに実在していると如実に知る。」という表現において、般若経類ないし中観派の空性説に対して、瑜伽行派の空性説の特色を表わしている部分は、「[A] に残っている [C] はここに実在している」という箇所である。

『菩薩地』では、空性の定型的表現における [A] [B] [C] に各々次のような内容を有している。

[A] = 色等と名づけられる事 (rūpādisamjñakam vastu)

[B] = 色というかくの如き等の仮説から成る法 (rūpamityevamādi-  
prajñaptivādātmako dharmah)

= 色というかくの如き等の仮説の自体 (rūpamityevamādi-  
prajñaptivādātman)

[C] = 色というかくの如き等の仮説の依り所 (rūpamityevamādi-  
prajñaptivādāśraya)

= 事 [のみ] (vastu [-mātra])

空の正観の後に残っている実在である〔C〕としての仮説の依り所とは、事 (vastu) を指しているが、『菩薩地』では、その事 (vastu) とは、<sup>(9)</sup> 眞実相 (tattvalakṣaṇa) を表わすもので、不可言の自性 (nirabhilāpyasvabhāva) を有する法であり、所知障清浄智・法無我智・無分別智の領域 (gocara) ・境界 (viśaya) にある勝義の実有 (paramārthasadbhūta) <sup>(10)</sup> <sup>(11)</sup> <sup>(12)</sup> <sup>(13)</sup> であるとされる。事 (vastu) は、色・受・想・行・識ないし涅槃 <sup>(14)</sup> という仮説 (prajñaptivāda) の因 (nimitta) ・根拠 (adhiṣṭhāna) ・依り所 (āśraya) であり、事 (vastu) をもとに仮説がなされる。事 (vastu) 無くしては仮説も有りえない。しかし、事 (vastu) は仮説 (prajñapti) を離れて事のみ (vastumātra) であって、事と仮説は相互に客 (āgantuka) の関係にあり、事のみ (vastumātra) <sup>(15)</sup> の上に仮説のみ (prajñaptimātra) が有るとされる。事 (vastu) は、一切の分別戲論の相 (nimitta) を離れて寂靜である点で無相である。 <sup>(16)</sup> このような事 (vastu) が勝義に実有であるとみるところに『菩薩地』の基本的立場がある。空性の定型的表現における〔A〕の「色等と名づけられる事」も、以上に見た事 (vastu) の性格から、仮説そのものでもなく、仮説から成る法でもなく、言説 (abhilāpa) が基づいて起こるところの可言の事 (abhilāpyavastu) <sup>(17)</sup> ではなく、仮説がその上に有るところの、不可言の事を意味しており、それは決して三性説における依他起性 (paratantrasvabhāva) の如きものではない。

〔A〕の「色等と名づけられる事」は本質的に〔C〕の事 (vastu) と異ならない。『菩薩地』では、「色等と名づけられる諸法は、不可言の事境 (artha) <sup>(18)</sup> として存在している」とみなす。空の正観の後に残っている〔C〕の実在は、本質的に〔A〕の実在を意味している。それゆえ、『菩薩地』では、〔A〕が〔B〕の点で空であるとき、端的に〔A〕そのものは実在であるとされる。このことは、本稿の冒頭に引用した『菩薩地』の中に悪取空を批判する箇所で見られていた。すなわち、「その〔B〕点で空であるところのそれ〔B〕を無とみなし (tacca necchati yena śūnyam) , 空なるもの〔A〕それ〔A〕も無とみなす (tadapi necchati yat śūnyam) 。」のが悪取空であるのに対して、「その〔B〕点で空であるところのそれ〔B〕は非有であるから (yena hi

sūnyam tadasadbhāvāt), しかも空なるもの〔A〕それ〔A〕は実有であるから (yacca sūnyam tatsadbhāvāc), 空性が妥当であろう。」と説かれている。

『菩薩地』における空の正観とは、〔A〕の色等と名づけられる事を、一切の言説を離れており (sarvābhilāpaviśiṣṭa) 不可言である (nirābhilāpya) と見る<sup>(19)</sup>こと、言い換えれば、色等と名づけられる諸法を、不可言の自性を有するものとして勝義に存在していると見ることに意義を有している。

『菩薩地』では、「勝義の実有である事 (vastu) を損滅しつつ全く一切無いとして損う<sup>(20)</sup>」者は、「法 (dharma) と律 (vinaya) を損っている<sup>(21)</sup>」として厳しく批判され、「一類の者たちは、大乘と相応し甚深であり空性と相応し密意趣の義によって表現された難解な諸経典を聞いて、如実には所説の意味を解しないで、不如理に分別し、不合理によりもたらされた単なる尋思によって、次のような見解が生じ次のように説く、『一切は仮説のみにすぎない。これが真実である。そしてこのように見る者は正しく見る。』と。<sup>(22)</sup>とあり、彼は「最たる虚無論者 (pradhāno nāstikah)<sup>(23)</sup>」と非難されるのであるが、そこでの「大乘と相応し甚深であり空性と相応し密意趣の義によって表現された難解な諸経典」とは、般若経類を指していることは疑いなく、般若経類の空性説の密意趣を解しないで、実有の事 (vastu) をも無いとなす虚無論的な考え方が批判されているのである。『菩薩地』菩提分章では、「甚深なる、如来所説の、空性と相応する諸経典」の如来の密意趣を解しない衆生に対して、菩薩は随順会通方便善巧によって、その密意趣を会得させるとして、それら諸経典に説かれる(1)諸法の無自性であること、(2)事無きこと、(3)不生不滅であること、(4)虚空と等しいこと、(5)幻・夢の如くであることの各項にわたり、不可言の事の実在を認める立場から解釈を施し具体的に会通をなしている。<sup>(25)</sup>『菩薩地』は、般若経類の空性説の密意趣を明かし会通するという形で、般若経類に由来する虚無論的な空性論の克服を旨ざしているものと解される。それは、『解深密経』無自性相品に示される<sup>(26)</sup>三時法輪の教判に意図された第三時法輪の第二時法輪に対してもつ意義、すなわち、一切法無自性の義を説くに、隠密の相を以てする未了義

(neyārtha) の第二時法輪に対して顕了の相を以てする了義 (nītārtha) の第三時法輪の意義とも相応する。その意味で、『菩薩地』は、般若経類の空性説を踏まえつつその密意趣を開顕し明瞭に展開せしめた意義を有しているとも言えるが、『菩薩地』を始めとする瑜伽行派の空性説の特徴を成す有的な側面に目を向ける時、瑜伽行派の空性説の背景は、実のところ『小空経』に見られるような初期仏教の空観の伝統に連なっていることを認めないわけにはいかない。

## 3

さて、瑜伽行派の空性説は、般若経類ないし中観派と異なって空性の定型的表現の後半部（「[A]に残っている [C] はここに実在している」）に特色を有する点で一致しているが、『菩薩地』と瑜伽行派の他の論書との間には、空性の内容に関して本質的な相違が存する。以下、空性の定型的表現における [A] [B] [C] の各意味内容を『菩薩地』を中心に対照させてみれば次の如くなるであろう。（次頁の対照表参照）

以上の対照に見られるように、『菩薩地』と他の瑜伽行派の諸論書との間には、空性の内容に関して明らかに一線を画している<sup>(31)</sup>。空の正観の後に残っている勝義の実在（＝[C]）に関して『菩薩地』では、色というかくの如き等の仮説の依り所としての不可言の事〔のみ〕（vastu [-mātra]）が挙げられるのに対し、瑜伽行派の他の論書では、無我性・空性・法性あるいは識・虚妄分別が意味されている。この事実は、『菩薩地』の不可言の事〔のみ〕（vastu [-mātra]）の実在が、その他の瑜伽行派の論書では認められず否定されていることを示している<sup>(32)</sup>。『菩薩地』の勝義に実在する不可言の事〔のみ〕（vastu [-mātra]）は、他の論書におけるような [C] の法性・真如とは異なり、あくまでそれは勝義の不可言の法（dharma）である<sup>(33)</sup>。『菩薩地』では、[A] と [C] は本質的に同一であるのに対し、他の論書では、[A] [B] [C] が各々、三性説における依他起性、遍計所執性、円成実性に相当する。ただ、虚妄分別（＝依他起性）の実在に関しては、[A]＝[C] の構造が見られる点で、『菩薩地』と同様の構造を含んでいる。しかし、内容的に

	〔A〕 色等と名づけられる事	〔B〕 色というかくの如き等の仮説から成る法	〔C〕 色というかくの如き等の仮説の依り所 = 事 (のみ)
<p>a. 『瑜伽論菩薩地』 (BBh, pp. 47 f ; 大正藏卷30, p. 489 a)</p>	<p>講堂 自身なる所依 〔この想に関わるもの (samjñāgata) 有為 無為</p>	<p>骨組あるいは屋根あるいは… 眼あるいは耳あるいは…… 人・村の想……</p>	<p>講堂 自身なる所依 林の想… (最後に) この所依 (āstraya) 〕 (27)</p>
<p>b. 『瑜伽論攝事分』 (Tib., D,zi 214b4ff ; P, hi 247 b2ff ; 大正藏卷30, pp. 812 b - 813 a)</p>	<p>一切諸法</p>	<p>常なる堅固な永続するものと 變な性質を有するものと 我我所 (常恒久久安住不變易法・我我所) ー 我我所</p>	<p>〔空性 (法性に攝される) ; 識 (vijñāna) の自性と識の因・縁と識の同類</p>
<p>c. 『顯揚聖教論』 (大正藏卷31, p. 490 a) (大正藏 同, p. 553 b)</p>	<p>諸法〔衆生遍計性所執法 諸行</p>	<p>二遍計性 衆生自性・法自性</p>	<p>無我性 衆生無我・法無我</p>
<p>d. 『阿毘達磨集論』 (Tib., D, ri76b3ff ; P, li 90 b 1) ff ; 大正藏卷31, p. 675 a) cf. 『雜集論』 (Tib., D, li183a3ff ; P, śi219 b 6ff ; 大正藏 同, p. 720 c 『Abhidharmasamuccaya- (2) bhāṣya』 pp. 51 f (§ 55 c)</p>	<p>蘊・界・処 諸行 (saṃskārah)</p>	<p>常なる堅固な永続する不變な性質を有するものと我我所 (常恒礙住不變壞法・我我等の相を有するものと我 (nityādhīakṣaṇa-ātman)</p>	<p>無我性 = 空性 (28) 無我性 (nairātmya)</p>
<p>e. 『中辺分別論』 (I, 1-2 ; I, 13 世親訳 ; 長尾本, p. 18 ; 23, ll. 4 f 安慧訳 ; 山口本, pp. 10-16 [特に p. 14] ; pp. 46 f</p>	<p>一切 有為 = 虛妄分別 (I, 2) (無為 = 空性</p>	<p>所取・能取 (grāhya-grāhaka)</p>	<p>虛妄分別 (abhūtaparīkalpa) ; (虛妄分別における) 空性 (śūnyatā) (30) = 二の無 (dvayābhāva) (30) 円成美性</p>

\* 三性説

は『菩薩地』と本質的な相違が存すると言わなければならない。

『菩薩地』以外の瑜伽行派の論書のうち、『瑜伽論撰事分』については若干説明を要すると思われる。

『瑜伽論撰事分』（契経事処撰）では、『小空経』の空性の定型的表現をまず引用し、それを譬喩により説明して次のように言う。

「譬えば、住所である講堂は、ある時はある人の集まりの点で空であるが、ある時は空ではない。その同じ講堂が、骨組、あるいは屋根、あるいは門、あるいはかぬき、あるいは付属物のうちあるもの、の点で空であっても、講堂そのものは、講堂の点で空ではない。同様に、自身なる所依 (lus dan gnas, ātmabhāvaḥ āśrayaḥ) は、受に関わるもの (vedanā-gata) と、想に関わるもの (saṃjñā-g<sup>(34)</sup>) と、思に関わるもの (cetanā-g<sup>o</sup>) ともいわれるが、その自身なる所依も、ある時は受・想・思の煩惱と随煩惱のうちあるものの点で空であっても、あるものの点で空ではない。その同じ自身なる所依が、ある時は眼、あるいは耳、あるいは鼻、あるいは舌、あるいは身の一部、あるいは意の一部、のうちあるものの点で空であっても、自身なる所依は全くすべての点で空なのではない。」<sup>(35)</sup>

以上の譬喩的説明は、『小空経』冒頭に示された譬喩を敷衍解釈したものであるが、そこには [A] = [C] という『菩薩地』の観点が導入されている。上記の説明に続いて、「もし諸法の自性が、自性の点で空であると観るならば、顛倒した、空性への悟入である。」<sup>(37)</sup>と述べて、無自性空に対しあからさまな批判をなすが、ここには般若経類の空性説への批判が意図されていることは明らかである。『撰事分』では更に『小空経』の本論の内容が要約されて示されている。<sup>(38)</sup>『撰事分』の以上の箇所を見る限り、『小空経』の内容説明に加えて、自性の点では空でない [A] そのものの実在を認める『菩薩地』の立場をとるかに見えるが、『撰事分』自身の空性説の真意は、実はそこに必ずしも明らかになされていないのである。『撰事分』そのものの空性説はかえって次の箇所に伺われるからである。

「有為 (saṃskṛta) と無為 (asaṃskṛta) とのこの二種がある。そのう

ち、有為は、常なる堅固な永続する不変な性質を有するもの(nitya-dhruvaśāsvata-avipariṇāma-dharmin)と、我と我所(ātmatmīya)の点で空である。無為は、我と我所の点で空である。空性(śūnyatā)は、それにとって因が無いところの(その)法性(dharmatā)に撰され、法爾道理に基づく。それは、このようであって別様ではないと遍くただ法爾道理のみに基づく。<sup>(39)</sup>」

ここには、『小空經』の敷衍説明において、「講堂」あるいは「自身なる所依」(=[A])は、自性の点では決して空ではなく、それ自体(=[A])は実在するもの(=[C])であると示された基本的な観点には言及されず、ここでは空性=法性が[C]の内容としてほのめかされており、一切諸法を意味している有為・無為<sup>(40)</sup>(=[A])は、それ自体として[C]の実在とは認められていない。このことに関連して次の法無我に関する箇所が注意される。

「四つの因(kāraṇa)によって、法無我(dharma-nairātmya)の究極に到る。(すなわち)(1)一切諸法の無我とは、識(vijñāna)の自性と識の因・縁と識の同類(sahāya)を除いて、それより他のものは不可得により、(2)識は無常であることにより、(3)その因・縁は無常であることにより、(4)その同類は無常であることにより。<sup>(41)</sup>」

一切諸法は、識の自性と識の因・縁と識の同類を除いて他は不可得とされることから、先の引用と考え合わせる時、有為・無為としての一切諸法に残っている[C]の実在としては、空性=法性ととともに、識(vijñāna)の自性と因・縁と同類が意図されているとみなされるであろう。『撰事分』では、このように、『小空經』に基づく敷衍をなしつつも、究極的に『菩薩地』のような立場をとらず、かえて、『阿毘達磨集論』以下の諸論書と本質的に同じ空性説が暗示されていることが知られる。

少なくとも空性説に関して、『撰事分』においては、思想的な統合整理が行なわれていない。この事実が、『撰事分』が、『菩薩地』の思想的立場から唯識思想の立場への転回の過渡期に位置することを示していると言えよう。

以上、瑜伽行派における、『小空經』に由来する空性の定型的表現の内容的

考察を通じて、『菩薩地』と他の瑜伽行派の諸論書との間に空性説の内容に関する本質的な相違が認められたが、その相違は、唯識思想成立以前の瑜伽行派の思想的立場と唯識思想の立場との本質的な相違に由来する。四尋思・四如実智の展開過程のうちに認められる瑜伽行派の、『菩薩地』の思想的立場から唯識思想への立場への転回<sup>(42)</sup>の事実は、空性説の上にも伺い知ることができるのである。

## 4

瑜伽行派において、その思想は実践と深い関わりを有している。『菩薩地』の不可言の事 (vastu) や唯識論書の識 (vijñāna)・虚妄分別 (abhūtaparikalpa) は、瑜伽行派のそれぞれの思想的立場の基盤をなすものであるが、いずれも空性の定型的表現における「残っているもの (yat...avaśiṣṭam bhavati tat)」に関係していることはすでに見た通りである。その「残っているもの」とは、空観の実践の究極になおも残っているものであって、空観の実践無くしては決して有りえない概念であり、空観の実践を前提としている。瑜伽行派の基本的思想は、本質的にこの空観の実践と密接に結びついているのである。

さて、瑜伽行派におけるいわゆる<空観>の実践は、『小空経』に見られる空観の形態そのままではない。以下、瑜伽行派における「残っているもの」の証得に至るいわゆる<空観>の実践の具体的様態について見てみたいと思う。

まず、『菩薩地』について考察することにする。

不可言の事 (vastu) の実証に至る実践の様相に関し、真実義章には次のような説明が見られる。

「実にかの菩薩は、その深く入った法無我智によって、一切諸法が不可言の自性を有することを如実に知って、いかなる法もいかようにも分別しないで、かえて事のみ (vastumātra)、真如のみ (tathatāmātra) を捉える。しかも彼には、それは事のみとか真如のみというこのような(思い)は生じることなく、かの菩薩は事境 (artha) に入る。究極の事境 (arthe parame) に入りつつ、一切諸法をか真如の点で平等平等と如実に智慧

をもって見る。」<sup>(43)</sup>

事 (vastu) の証得は、法無我智によって一切諸法が不可言の自性を有することを如実に知って、いかなる法もいかようにも分別しない (na kaṃcid dharmam kathamcit kalpayati) という実践に基くのである。その点について菩提分章にも次のように説かれている。

「さらに、諸菩薩によって、聖智をもって、それら、言説にて起こされ、戯論に伴われた諸の邪想分別がすべて全く除かれる (apanītā bhavaṃti) 時、その時、彼ら最勝聖者なる菩薩にとって、その聖智によって、一切の可言の自性の全く無き、虚空の如き、清浄な、かの不可言の事が顕われる。」<sup>(44)</sup>

諸の邪想分別 (mithyā-saṃjñā-vikalpāḥ) の除去という実践を通じて不可言の事 (vastu) が実証されるのである。

そこで注目されるのは、一切諸法が不可言の自性を有するということの経証の一つとして真実義章に「世尊によって Saṃthakātyāyana に囚んで語られた。」として引用される次の āgama の文句である。

「さて、Saṃthaよ。比丘は地 (pṛthivī) に依って静慮せず、水に (依って静慮) せず、火にせず、風にせず、虚空・識・無所有・非想非非想との処にせず、この世にせず、来 (世) にせず、日・月二つにせず、見・聞・覚・知されたもの (や) 得られたもの (や) 尋思されたもの (や) 意によって随尋・随伺されたものにせず、その一切に依って静慮しない。どうして、静慮者は地に依って静慮せず及至一切に依って静慮しないのか。さて、Saṃtha よ。比丘には、地において地想 (pṛthivī-saṃjñā) それは消滅している [除遣されている] (vibhūtā bhavati)。水において水想及至一切において一切の想それは消滅している [除遣されている]。このように静慮する比丘は、地に依って静慮せず及至一切一切——以上に依って静慮しない。… (後略) …」<sup>(45)</sup>

この『菩薩地』に引用された āgama の文句を含む経は、パーリニカーヤでは、PTS 本Aṅguttara- Nikāya V (Nissaya- Vagga X)<sup>(46)</sup>、漢訳では、『雑

阿含經』926經<sup>(47)</sup>、『別訳雑阿含經』151經に相当し、中でも『雜阿含經』926經によく相応する(ただし、『菩薩地』における引用は、經の核心的部分を原典より抄録したもの)<sup>(49)</sup>。その經の内容はおよそ次の如くである。Samthakātyāyana (パーリ文では Sandha, 『雜阿含』では「洗陀迦旃延」, 別訳では「大迦旃延」) に対して、世尊は、良馬によって静慮されたものを静慮せよ、未調馬によって静慮されたものを静慮するなかれ、槽につながれた未調馬は「まぐさ、まぐさ」と静慮するのに対して、良馬は「まぐさ、まぐさ」と静慮しないという譬喩<sup>(51)</sup>を挙げて、比丘は静慮をなすに当たって、欲・貪や瞋恚や昏沈・睡眠や掉挙・後悔にまともわれ負かされた心で住せず、すでに生起しているそれらの出口 (nissaraṇa) を如実に知り、「彼は、地に依って静慮せず、水…火…風…空無辺処…識無辺処…無所有処…非想非非想処…この世…来世…見・聞・覺・知されたもの(や)得られたもの(や)尋思されたもの(や)意によって随伺されたものに依って静慮せず、しかも静慮する<sup>(52)</sup>。」と説くが、そのような静慮がどうしてなされるかの方法・理由として、「地において地想は消滅している〔除遣されている〕(vibhūtā hoti)」云々と説明する<sup>(54)</sup>。以上が、その經の内容であるが、その趣旨は、比丘が地等のあらゆる対象を対象として静慮をなす場合に常に、その三昧の対象の想 (saññā ; samjñā) が消滅している〔除遣されている〕(vibhūta) という在り方で静慮しなければならないという三昧の初歩的基本的な方法ないしは在り方に関する心得について教誡をなしたものである。

『菩薩地』では、以上の āgama の引用後、次の説明を加えている。すなわち、  
 「地等と名づけられる事 (vastu) の上における地というかくの如き等の名・仮立・仮設 (nāma-saṃketa-prajñapti) , それが地等の想 (samjñā) と言われる。そして、その想は、地等と名づけられる事の上において増益するものともなり損減するものともなる。それから成る自性を有する事に執するものが、増益する(想)であり、事のみ (vastumātra) を勝義に滅と執するものが、損減する想と言われる。そこで、その想 (samjñā) は彼には消滅している〔除遣されている〕(vibhūtā bhavati)。除遣 (vibhava) は、断 (prahāṇa) , 捨 (tyāga) と言われる。」<sup>(55)</sup>

この説明により伺われることは、『菩薩地』に、一切諸法が不可言の自性を有するということの経証の一つとして、その āgama が引用される背景には、『菩薩地』にとって、想 (saṃjñā) の除遣 (vibhava) が不可言の自性を有する事 (vastu) を証得するための必要不可欠な実践とされていることである。このことから、すでに先に見た、「いかなる法もいかようにも分別しない」とか、「諸の邪想分別がすべて全く除かれる」と表現される、不可言の事 (vastu) の証得に関わる実践も、具体的には想の除遣を内容としていることが知られる。想の除遣が『菩薩地』のいわゆる<空観>の本質を成している。

想の除遣というこの実践は、実は『菩薩地』において三昧の最も初歩的にしてしかも基本的な作意であることが、建立 (Pratiṣṭhā) 章の如来の十力 (bala) の説明中に伺われる。そこでは、如来は、種種界智力 (nānā-dhātujñānabala) により衆生を、その根 (indriya) ・ 意楽 (āśaya) ・ 随眠 (anuśaya) に応じて教授 (avavāda) をなすことによって各々の悟入の門に正しく導くとして、詳しく次のように説かれている。以下長文に亙るが、実践の具体相を明かす重要な箇所なので煩を厭わず引用することとする。

「そのうち、諸如来が、諸声聞に対しそれぞれの悟入の門において教授を与える通りに、『声聞地』(Śrāvakabhūmi) にすべて一切が間断なく宣説され、明了に顕示され施設され開示されている。またさらに、どのように諸如来は、初歩者 (ādikarmika) にしてその始めを為す、三昧の資糧の把握に従事しており、心の安住を欲して心の安住に(従事している)菩薩に教授するのか。以下、如来は、偽り無き、三昧の資糧を尊重する初歩者にしてその始めを為す菩薩に、その始めに次のように教授する。『来たれ。汝、善男子よ。離れた臥具のところに行って、単独にして第二の者無く、汝に、父母あるいは親教師・軌範師によって付けられた名、その名を内に作意せよ。そして、さらに次のように作意せよ。私には、この名・想・仮設・仮立が起こるところのその何らか、六処を離れた、自性として成就している法が、内にあるいは外にあるいは両者の中間に存在しているのか。それゆえ、汝はこのように如理に作意しつつその法をもはや語らない。か

えって、汝には次のような（思い）が生ずる。客なる諸法にこの客なる想が起こっていると。汝、善男子よ。その自分の名に客であるとの想が生じ、得られたとき、それゆえ、汝、汝の眼における眼の名、眼の想、眼の仮設、それも内に如理に作意せよ。そしてさらに次のように作意せよ。この〔=私の〕眼には二つのものが可得である。この眼という名、想、仮設とこの事のみ（vastumātra）とである。それに（=事のみ）この名、想、仮設がある。これより更には無く、これより多くのものは無い。この眼における名、想、仮設それはとにかく眼ではない。それに眼の想があるところのその事も自性として眼ではない。それはなぜか。なぜならば、そこに眼の名、眼の想、眼の仮設無くしては、誰にも眼の覚は起こらない。もし、この事（vastu）がその名によって言説されるころのそれ自体として成就しているならば、それには、さらにそれ（=名）を待って眼というこのような覚は起こらない。かえって、名をもとより聞かず分別しない者たちにさえも、その事（vastu）に眼という覚が起こるのであろう。しかし、〔覚が〕現に起こることは不可得である。それゆえ、この、眼の名、眼の想は、客なる法において、客なる（想）である。このように、内にこの眼を作意しつつある汝にとって、眼の想にも、客であるとの想が生じ、得られるであろう。眼におけるように、耳・鼻・舌・身 及至 見・聞・覚・知されたもの（や）得られたもの（や）尋思されたもの（や）意によって随尋・随伺されたもの、要約して、一切諸法の想に、客であるとの想が生じ、得られるであろう。このように、自己自身における想、その除遣（vibhava）のために加行道が正しく把握されるであろう、及至一切諸法における想、その除遣のために加行道が正しく把握されるであろう。それゆえ、汝はこのように、一切の所知の善く伺察された覚によって、一切諸法の想に、客であるとの想をもって、一切諸法における一切の戲論の想をくり返し捨てて（apaniyāpanīya）無分別にして無相なる心をもって、事境のみ（arthamātra）を捉えることに専念して、かの事（vastu）に多く住せよ。』<sup>(56)</sup>

このように、『菩薩地』では、想の除遣が、初歩の段階から指導される基本的な実践法とされていることが注目される。

また、上に引用した文に引続きさらに次のようにある。

「『このように、汝に、如来智清浄三昧の境 (gocara) から、心一境性が得られるであろう。それゆえ、汝、もし不浄を作意するならば、かの作意を捨てるようなことがあってはならない。もし、慈、縁性縁起、界差別、入出息念、初静慮及至非想非非想处、無量なる菩薩の静慮・神通・三昧・等至を作意するならば、かの同じ作意を捨てるようなことがあってはならない。このように、汝に、この菩薩の作意は漸次に無上正等菩提に至るまで現われるであろう。』と。この諸菩薩の道は、あらゆる处に通じると知られるべきである。過去世にも、諸如来は初歩の菩薩にこのようにこそ教授したし、未来世にも、このようにこそ教授するであろうし、現在世にも、このようにこそ教授する。……」<sup>(57)</sup>

上記引用文中に下線を施した「捨てるようなことがあってはならない」とされる「かの作意」とは、諸法 (事 vastu) における想 (samjñā) に客である (āgantuka) との想をもって、その想の除遣をなす作意である。想の除遣は、初歩から無上正等菩提に至るまで、不浄観等の一切の三昧の作意において決して捨ててはならないあくまで基本的な作意として強調されている。<sup>(58)</sup> このことは、地・水・火・風や四無色等の一切の三昧の対象に関して想の除遣が説かれていた、先に見た真実義章に引用の āgama の趣旨とも相通じることが注意される。想の除遣が、(1)三昧の作意の初歩的でしかも基本的な在り方とされる点と、(2)一切の三昧に関わっている点で、『菩薩地』の想の除遣という実践は、かの āgama に示される初期仏教の実践の在り方と基本的には異なるものではないと言えよう。上記の『菩薩地』の引用文中に、想の除遣に関する作意について、現在世のみならず過去世にも諸如来は教授したという表現にも、過去の伝統との深い連関を感じさせる。

因みに、瑜伽行派の伝統の一端を示すと見られる『声聞地』(Śrāvakabhūmi) でも、「正しい加行のあり方 (samyakprayogatā) として除遣が強調されてい

る。すなわち、

「くり返し勝解される所縁 (ālambana) の除遣 (vibhāvanā) によって、正加行 (samyakprayoga) と言われる。…(中略)…また、除遣は五種である。(すなわち) (1)内に心を摂めること (adhyātmacittābhisamkṣepa) によるもの、(2)不念作意によるもの、(3)その他の作意によるもの、(4)対治作意によるもの、そして(5)無相界作意によるもの。そのうち、内に心を摂めることによる(除遣)は、観 (vipaśyanā) の先行する九種心住 (navākāra-cittasthiti) によってである。……ここでの正意として、(1)内に相を摂めることによるものと、(2)不念作意によるものが意図されている。……どのようにして(不浄等の所縁に)行ずるのか。尋思・伺察をくり返し行ずる、相 (nimitta) のみにしたがう観 (vipaśyanā) によって、一辺倒に観に励むのではなく、さらに、観の相を転じて、その同じ所縁を止 (śamatha) の行相をもって作意する。彼によって、その所縁はその時に離されて捉えられない。それを所縁とする止が起こるから、それゆえ、離されるのではない。相をなさない、(すなわち)分別しないから、それゆえ、(所縁は)捉えられない。このように、内に摂めることにより所縁を除遣する (vibhāvayati) 。……(後略) ……」<sup>(59)</sup>

ここに正加行とされる除遣 (vibhāvanā) は、九種心住によって内に心を(相を)摂めることによる除遣である。『声聞地』では、九種の心住における心一境性は止 (śamatha) に属することから、除遣は止観の中の止 (śamatha) に関わるものである。上記の引用文に引続いて、所縁を勝解する、すなわち、心中にありありと影像を思い画くだけで、くり返し除遣しなければ、その勝解 (adhimo-kṣa) は明瞭にはならず、くり返し勝解をなし、くり返し除遣してこそ、いよいよ明瞭となり、所知事を現観するに至ると述べられ、それが、習いたての絵画きの弟子が絵を習うのに、画いては消し画いては消してこそ、いよいよ形が明瞭となっていく、このように正しく励めば後に師と対等に至ることに譬えられている。<sup>(61)</sup> 以上の譬喩では、除遣が勝解の影像の明瞭化に資する点に重点が置かれているようであるが、必ずしも除遣の意義は尽くされていない。『声聞

地』では、所縁の除遣は、所縁自体の放棄ではなく、「相をなさない (na nimittikaroti) 」すなわち所縁の相の断捨、ないしは、「分別しない (na vikalpayati) 」すなわち所縁を捉える分別 (vikalpa) の断捨を意味していることは、上記の引用に明らかである。観 (vipaśyanā) の所縁が有分別影像 (savi-kalpa-pratibimba) , 止 (śamatha) の所縁が無分別影像 (nirvikalpa-p<sup>o</sup>) と称されている<sup>(62)</sup>ところにも、除遣の対象が分別 (vikalpa) にあることが示されている。『声聞地』の所縁の除遣の意義が、無相化なし無分別化にあるとすれば、かの āgama に示される初期仏教の除遣の意義と相通じる。ただし、『声聞地』の所縁 (ālambana) の除遣 (vibhāvanā) は、『菩薩地』の想 (saṃjñā) の除遣 (vibhava) と用語法を異にしており、『菩薩地』への直接の脈絡はむしろ乏しいように思われる。

5

『菩薩地』では、想の除遣が、三昧の作意において最も基本的なものであり、不可言の事 (vastu) を証するために不可欠な前提としての実質的な<空観>の実践であることが知られたが、『菩薩地』以後に成立した唯識観においても、除遣が、菩提を証する重要な契機とされて<空観>の実質を担っている。

『解深密経』 (Saṃdhinirmocanasūtra) には、分別瑜伽品 (Byams pa 弥勒章) に、次のように説かれている。

「『世尊よ。止観を修習する菩薩は、何の作意によって何の相 (nimitta) をどのように除遣するのか (vibhāvayati) 。』『弥勒よ。真如作意によって法相と義相を除遣する。名 (nāman) において名の自性を可得せず、その所依の相 (nimitta) を観せずして除遣する。名におけるが如く、句においても、文においても、一切の義においても知られるべきである。弥勒よ。界の中に界の自性を可得せず、その所依の相をも観せずして除遣する。』<sup>(63)</sup>

とあり、止観の修習における相 (nimitta) の除遣が説かれる。除遣し難い十種の相 (nimitta) はまた、空性によって除遣するとされ、それら十種の<sup>(64)</sup>

相を除遣する時、何の相を除遣して、何の縛の相から解脱するか、たとえば、  
「三昧の境である影像の相 (samādhigocara-pratibimba-nimitta) を除遣して、その雑染の縛の相から解脱し、それをも除遣する。」<sup>(65)</sup>

そして、見道から修道に至って、

「ある人が、細かい楔によって粗大な楔を出すように、彼 (=菩薩) もまた楔によって楔を出すやり方で、内相 (adhyātmanimitta) を除遣することによって、雑染分の一切の相を除遣して相を除遣するとき、諸の麁重 (dauṣṭhulya) をも除遣する。一切の相と麁重とを克服することによって、次第に後々の地 (bhūmi) において金の如くに心を陶冶し、無上正等菩提を現等覚して、所作成満の所縁を得る。」<sup>(66)</sup>

と説かれるように、『解深密経』において諸相の除遣は、諸麁重の除遣ないし無上菩提の証得にとって極めて重大な意義を担っている。さらに注意されることは、≪唯識に基づき所取の不可得に悟入し、所取の不可得に基づき能取の不可得に悟入する≫という唯識観の実践構造が、この『解深密経』にあっては、≪心に異ならない所依としての三昧の境である影像の上の法・義の相 (nimitta) を除遣して、さらに所依の相をも除遣する≫という除遣の実践体系として示されていることである。ここに、唯識観が所取相の除遣と能取相の除遣とから成る相の除遣の体系に他ならないことが知られる。

『大乘経莊嚴』 (Mahāyānasūtrālamkāra) の功德章XIX, 第50偈にも、

「現前に立てられた相 (nimitta) と自ら存している (相) との一切を除遣しつつ (vibhāvayan), 賢者は最上の菩提を得る。」<sup>(68)</sup>

とあり、また同じ偈が『摂大乘論』入所知相分にも存する。相 (nimitta) の除遣が最上菩提の証得の契機とされる点は、『解深密経』分別瑜伽品と同様である。この『大乘経莊嚴』における相の除遣は、第50偈の(世親) 釈に、「それ(相)の除遣 (vibhāvanā) は、遠離 (vigama), 無所縁となること (anālambanībhāva) であり、その方便は、相の能対治としての無分別 (akalpanā) である。」とされるように従来見てきた除遣の概念と異なるものではない。ところが、XIX, 第52偈の(世親) 釈には、異質な除遣の解釈が見出さ

れる。今その（世親）釈の言葉を用いて要点を記せば次の通りである。＜菩薩は相 (nimitta) と真如 (tathatā) とが異なっていないことを見るから、声聞の無相よりも菩薩の無相が勝れている。なぜならば、諸声聞は相と無相とが異なっていることを見て、一切諸相の不作意や無相界の作意により無相に入るのに対し、諸菩薩は真如を離れて相を見ないで、相を無相と見る。実在を本質とする真如と非実在を本質とする相への現見が分別 (vikalpa) を支配する。＞ 以上に知られるように、XIX, 第52偈の（世親）釈では、無相に至る従来の伝統的な声聞の除遣の実践が批判され退けられている。このような伝統的な除遣の実践の批判はすでに般若経類に見られるところである。例えば、『八千頌般若』には、

「世尊曰く、『スプーティよ。般若波羅蜜を行ずる菩薩大士、彼はどこで行ずるのか。』 曰く、『世尊よ。勝義において行じます。』 世尊曰く、『これをどう思うか。スプーティよ。勝義において行ずる菩薩大士、彼は相において行ずるのか。』 曰く、『そうではありませぬ。世尊よ。』 世尊曰く、『これをどう思うか。スプーティよ。彼には相 (nimitta) は除遣されていないのか。』 曰く、『そうではありませぬ。世尊よ。』 世尊曰く、『これをどう思うか。スプーティよ。般若波羅蜜を行じつつある菩薩大士にとって相は除遣されているのか。』 スプーティ曰く、『世尊よ。かの菩薩大士は次のようには努めませぬ——どのようにして私は菩薩行を行じつつ、この世で相の断捨 (nimitta-prahāṇa) を得ようかと。また彼がもし得るならば、一切の仏法が満たされていない点で声聞となるでありましょう。世尊よ。その相を知りそして特相 (lakṣaṇa) なるもの相 (nimitta) なるものを無相と熟知するという、これが菩薩大士の善巧方便です。』<sup>(70)</sup>

ここには、相を無相と熟知する善巧方便によって、相の断捨をなさないとして、<sup>(71)</sup> 伝統的な相の除遣が退けられている。そこには、無相に至る過程に関する本質的な見方の相違が存する。(1)伝統的な相の除遣は、相 (nimitta) そのものを断捨して、相の無くなった無相を現証することを意味しているのに対して、(2)『八千頌般若』では、相を断捨せず、相をそのまま、無相を本質とする

ものと見て、相そのものの無相化を果たす。『声聞地』、『菩薩地』やその中に引用された āgama、『解深密經』、『大乘經莊嚴』等の初期仏教や瑜伽行派における除遣は、前者(1)に属する。これに対し『大乘經莊嚴』XIX、第52偈の(世親)釈に見られる相の除遣の解釈は、まさに後者(2)の立場に基づくものとしなければならない。それは多分に般若經類の影響を受けていると考えられる。(1)と(2)の相違は、空性説の相違と関連する。

## 6

瑜伽行派の空性説が、基本的には、『小空經』に見られるような空観に由来し、般若經類に見られるような空性説には由来していないことについては、すでに検討した通りであるが、そのような瑜伽行派の空性説の系譜は、空・無相に至る<空観>としての除遣の実践の上にも確認された。『小空經』の空観も(想)除遣を本質としている<sup>(72)</sup>。これに対して、『八千頌般若』等の般若經類の空観は除遣を本質としていない<sup>(73)</sup>。空・無相に至る除遣の実修を低次のものとして退け、熟知するのみで現証はしないという般若經類の立場は、衆生への大悲に基づきつつも、心解脱(ceto-vimutti 心(=三昧)による解脱)よりも慧解脱(paññā-vimutti)の重視を意味する<sup>(74)</sup>。一方、除遣の実修を通じて菩提を証得するという瑜伽行派の立場は、心解脱の重視を意味する。瑜伽行派は、初期仏教以来の心解脱を重視する系譜の上にあると考えられるのである。瑜伽行派(Yogācārah)の学派名はまさにそれを象徴していると言えよう。

## 註記

(1) 主な研究に、

- a. 海野孝憲「彌勒の唯識説にみられる空性(śūnyatā)の用例とその意味について」印仏研15-1.
- b. 長尾雅人「餘れるもの」印仏研16-2.
- c. 長尾雅人「空性に於ける「余れるもの」」(『中観と唯識』所収)

<G.M. Nagao, " 'What Remains' in Śūnyatā: A Yogācāra Interpretation of Emptiness," Mahāyāna Buddhist Meditation: Theory and Practice, ed. by M. Kiyota, 1978.

- d. 向井亮「『瑜伽論』の空性説—『小空経』との関連において—」印仏研22-2.
- e. 横山紘一「唯識思想の空」（仏教思想研究会編『仏教思想7空 下』所収），1982.
- f. 向井亮「阿含の〈空〉に対する大乘の解釈とその展開」印仏研31-2.
- (2) Bodhisattvabhūmi (BBh), ed. by U. Wogihara, p. 47, l. 8-p. 48, l. 2 ; ed. by N. Dutt, p. 32, l. 6-1. 19 ; Tib., D, wi 26b-27a1 ; p, shi 31b4-32a3 ; 大正蔵卷30, pp. 488c-489a.
- (3) 「その、色というかくの如き等の」荻原本の基く写本にはこれを欠くため Tib. よりの還梵がその脚註に示されているが、適切でない。N. Dutt 本の tena rūpamityevamādi- (p. 32, l. 16) に従う。
- (4) cf. 註(1) b, c 論文。
- (5) cf. 註(1) d 論文。
- (6) 『楞伽経』第2章に、空性の7種類が挙げられて説明が加えられる中、第7「彼彼空性」(itaretara-sūnyatā) が小空経に由来する空性の定型表現に基づくものであるが、説明の最後の箇所、*「その彼彼空性はすべての中、最も重要でない。これは汝によって捨てられるべきである。」* (Laṅkāvatāra sūtra, ed. by B. Nanjio, p. 75, ll. 18f.) とあって、『楞伽経』では排斥されていることが知られる。空性説に関する限り、『楞伽経』は瑜伽行派の中で特異な位置を占めている。
- (7) 『五蘊論』: Tib., D, 251a6ff ; P, 288a4ff. ここでは、まず, āgama として『小空経』の空性の定型的表現が掲げられ、次に『菩薩地』の真実義章の箇所(荻原本 p. 47, ll. 8-20) が出され、次いで『入楞伽経』の一偈(南条本第2章第191偈=第10章第305偈)に相当するものが挙げられ、最後に理証として、『菩薩地』(p. 45, l. 13-p. 46)あるいは『顯揚聖教論』(大正蔵卷31, p. 558c-559a)の内容に親しいものが出されている(以上の空性の定型的表現を始めとしていずれも本文には出典は記されていない)。そして以下に月称の批判が展開されている。cf. 山口益「月称造五蘊論における慧の心所の解釈」(『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』所収) pp. 311ff.
- なお、月称の『入中論』(Madhyamakāvatāra)にも、空性の定型的表現が挙げられ(Poussin 本 p. 139, ll. 9-14), 批判の対象とされている。cf. 本稿註(1)c 論文の註(3)。因みに、ツォンカパ(Tsoṅ kha pa)も瑜伽行派の考え方を示す中に空性の定型的表現を引用する(前後の文脈からして『菩薩地』からの引用と認められる)。cf. 片野道雄「ツォンカパ造了義未了義論の試解(-)」(大谷大学研究年報43) p. 77.
- (8) 『小空経』の空性説の内容については本稿では触れない。cf. 註(1) b, c 論文 ; 玉城康四郎「原始経典における業異熟の究明」(雲井昭善編『業思想研究』所収),

pp. 206ff ; 藤田宏達「原始仏教における空」(仏教思想研究会編『仏教思想7空下』所収), pp. 450ff ; 玉城康四郎「空思想への反省」(『仏教思想7空下』所収), pp. 924ff.

現行のパーリ『小空經』には若干の錯綜が認められることについては、すでに玉城論文(前者)に指摘され、さらに藤田論文で具体的に修正すべき箇所が示されている。その他、文献学上の問題については、本稿註(36)参照。

- (9) 『菩薩地』における事 (vastu) については、その真実義章 (Tattvārthapaṭala) の中で組織的に論じられている。cf. 拙稿「瑜伽行派 (Yogācārah) の問題点—唯識思想成立以前の思想的立場をめぐって—」哲学年報41 (九州大学文学部)。
- (10) BBh, 荻原本 p. 38, ll. 18ff.
- (11) *Ibid.*, p. 41, ll. 15f.
- (12) *Ibid.*, p. 44, l. 8.
- (13) *Ibid.*, p. 45, l. 18. cf. *ibid.*, p. 47, l. 6 : bhūtaṃ vastu ; p. 350, ll. 17 f : paramārthato nirabhiḷāpyasvabhāve vastuni.
- (14) *Ibid.*, p. 39, ll. 5ff.
- (15) *Ibid.*, p. 394, l. 23-p. 396. cf. 上掲拙稿 p. 33, ll. 4ff. 及び註(69), (84).
- (16) cf. 上掲拙稿 p. 35, ll. 1ff.
- (17) BBh, *op. cit.*, p. 265, ll. 16f. cf. 上掲拙稿 註(50).
- (18) *Ibid.*, p. 48, ll. 20ff.
- (19) *Ibid.*, p. 54, ll. 4ff.
- (20) *Ibid.*, p. 45, ll. 18f.
- (21) *Ibid.*, p. 45, l. 13.
- (22) *Ibid.*, p. 46, ll. 7ff.
- (23) *Ibid.*, p. 46, l. 18.
- (24) cf. 上掲拙稿 註(30).
- (25) BBh, *op. cit.*, p. 265, l. 3-p. 267, l. 2.
- (26) Saṃdhanirmocanasūtra, par É. Lamotte, p. 85 (VII, 30) ; 大正藏卷16, p. 697a-b ; 国訳 経集部 3, pp. 64-65.
- (27) 『小空經』の本論の取意引用中に説かれたもので『小空經』に等しい内容のものである。
- (28) この『阿毘達磨集論』では、真如、無我性、空性、無相、實際、勝義、法界は、同義語とされる。大正藏卷31, p. 666a. cf. 『雜集論』大正藏卷31, p. 702b ; ASBh, p. 14 (§10B), 因みに『撰大乘論』では、不可言法性 (nirabhiḷāpyadharmatā) が、無我性として顕わされる真如 (nairātmyaprabhāvita-tathatā) とされる。大正藏卷31, p. 364b.

- (29) ed. by N. Tatia.
- (30) 『大乘経莊嚴』(Mahāyānasūtrālaṃkāra)にも、二の無、無(の有)の用例が見られる。cf. 註(1)a論文。空性説に関して MSA は『中辺分別論』と同様の類型に属すると考えられる。
- (31) これまでは、本質的な相違が見落とされていた。cf. 宇井伯寿著『瑜伽論研究』, p.60, ll.10ff; 本稿 註(1)c論文(和訳) p.548, ll.8ff.
- (32) 『菩薩地』の「事」が採用されないことについては、四尋思・四如実智の上にも確認される。cf. 上掲拙稿(本稿註(9)) pp.38ff.
- (33) 『菩薩地』においても真如(tathathā)が説かれるが、その真如とは、一切諸法が不可言の自性を有すること(sarvadharmāṇām nirabhilāpyasvabhāvatā)を内実としている。cf. 上掲拙稿(本稿註(9)) p.26, l.24-p.27, l.6.及びその註(5)。  
また、法性(dharmatā)も説かれるが、真如の場合と同様な内実を有している。例えば、真実義章に引用される Bhavasamkrāntisūtra の偈中の dharmatā については次のような説明が見られる。  
yā punas teṣāṃ rūpādisamjñakānām dharmāṇām nirabhilāpyenārthena vidyamānatā saiṣā paramārthataḥ svabhāvadharmatā veditavyā.  
「それら色等と名づけられる諸法が不可言の事境として存在していること、それがこの勝義に自性として法があることである。」  
『菩薩地』には『法法性分別論』(Dharmadharmatāvibhāga)におけるような法性の概念は存しない。また、『解深密経』第1章の不可言無二の章段中の nirabhilāpyadharmatā は nirabhilāpyadharma + tā と解され、少くともその章段は『菩薩地』と同様な立場であることが知られる。cf. 拙稿「解深密経第一章と菩薩地」宗教研究56-4(255号)。
- (34) 『小空経』では専らこの「想に関わるもの」(saññā-gata)の語が使用されている。
- (35) Tib., D, zi 214b4-7; P, ḥi 247b2-6; 大正蔵卷30, p.812b-c.
- (36) Cūḷasufññītasutta, MN (PTS), vol. III, p. 104, ll.14-18: 「譬えば、この鹿母講堂は(pāsādo), 象・牛・馬・驪馬の点で空であり(suñño), 金・銀の点で空であり、女・男の集まりの点で空である(suññaṃ)<sup>(1)</sup>が、しかし、この空でないこと(idaṃ asuññataṃ)<sup>(2)</sup>, すなわち、この比丘サンガに基づいて唯一(空でないこと)がある。」  
(1)の suññaṃ は Nālandā 本のように suñño の形が正しい。(2)の asuññata を中性名詞と見た時、上記の訳のようになるが、形容詞と見る場合には、主語は pāsāda となり、したがって idaṃ asuññataṃ は ayaṃ asuññato と訂正を要する(『小空経』では以下同様な文句がくり返されるが、そこでは主語が saññāgataṃ であることから、idaṃ asuññataṃ のままで訂正を要しない)。

このように *asuññata* を形容詞と見る場合には、「……しかし、これ（＝鹿母講堂）は空ではない。すなわち、ただ一つ比丘サンガによってである。」となる。いずれにせよ、*asuññata* が内容的には、比丘サンガという点で鹿母講堂の空でないことを意味している（*asuññata* を中性名詞と見るとき、その内容的主語を比丘サンガと解するのは誤りである）。

- (37) Tib., D, zi 214b7-215a1 ; P, ħi 247b7 ; 大正蔵巻30, p. 812c.
- (38) Tib., D, zi 215a3-215b3 ; P, ħi 248a1-248b4 ; 大正蔵巻30, p. 812c-813a. 因みに、『撰事分』では、引き続き『大空経』に基づく説明をなす。
- (39) Tib., D, zi 213b4-6 ; P, ħi 246a6-246b1 ; 大正蔵巻30, p. 812a.
- (40) 『菩薩地』にも一切諸法を意味する有為・無為の例が見られる。BBh, 荻原本 p. 88, ll. 16f ; Dutt 本 p. 62, l. 11 (大正蔵巻30, p. 499a) : *dvidham vastu saṃskṛtamasaṃskṛtam ca* ; 荻原本 p. 276, ll. 16 ; Dutt 本 p. 187, l. 25 (大正蔵巻30, p. 543c) : *dvayamidam saccāsacca. tatra saṃskṛtam-asamskṛtam ca sat. asadātmā vātmīyaṃ vā*. なお、後者に関して『菩薩地』の異本である『菩薩善戒経』は、『菩薩地』と異なり次のようにある。「一切諸法凡有二種。一者有為有。二者無為有。有為有者謂我我所。無為有者所謂涅槃。」大正蔵巻30, p. 997a. 『菩薩地持経』は『菩薩地』に同じ。大正蔵巻30, p. 934c.
- (41) Tib., P, ħi 243b2-4 (Dはmi dmigsのmiを欠く) ; 大正蔵巻30, pp. 810c-811a.
- (42) cf. 上掲拙稿（本稿註(9)）pp. 41f.
- (43) BBh, 荻原本 p. 41, ll. 15-22 ; Dutt 本 p. 28, ll. 9-14 ; Tib., D, wi 23a7-23b2 ; 大正蔵巻30, p. 487b. なお、荻原本 ll. 17f : *na kaṃcid dharmaṃ kathaṃcit kalpayati* が Dutt 本に *na kiñcidvikalpayati*, また荻原本 ll. 19f : *vastumātram tat tathatāmātram ceti* が Dutt 本に *vastumātram vā etattathatāmātram caiti* とあるが、Tib. 訳漢訳に合致する荻原本に従う。荻原本 ll. 21f については、上掲拙稿（本稿註(9)）註(25)参照。
- (44) BBh, 荻原本 p. 266, ll. 10-15 ; Dutt 本 p. 181, ll. 10-13 ; Tib., D, wi 141a3f ; 大正蔵巻30, p. 541b. なお、荻原本 ll. 11-12 : *prapamca-saṃga-anugataḥ* は Dutt 本に *prapamca-saṃjñā-anugataḥ* とあるが、Tib. 訳漢訳に合致する荻原本に従う。ただし表記法としては *-saṅga-* (<√*sañj*) が正しい。また漢訳の大正蔵の返り点は不可、「……随<sub>二</sub>戲論<sub>一</sub>著上。」は「……随<sub>中</sub>戲論著上。」に訂正。
- (45) BBh, 荻原本 p. 49, l. 16-p. 50 ; Dutt 本 p. 33, l. 23-p. 34 ; Tib., D, wi 27b5-28a ; 大正蔵巻30, p. 489b. なお、荻原本 p. 50, l. 1 : *sarva-saṃjñā* は Dutt 本に *yā saṃjñā* とあり、恐らく本来は *yā sarvasaṃjñā* であったと考えられる。なお、本文中の引用で（後略）とした箇所は次の通りである。  
「このように静慮する比丘を、インドラと共なる、自在天と共なる、造物主と共

なる神々が搖かに敬礼する。

『汝が何に依って静慮するかを（我らは）汝の上に知らず。

（その）汝に敬礼。良馬の如き人よ。汝に敬礼。最上人よ。』」

- (46) パーリニカーヤで他に類似の趣旨を有するものに、AN. V (Ānisaṃsa-Vagga VI, VII), (Nissaya-Vagga VII, VIII, IX), (Anussati-Vagga XIX, XX, XXI, XXII) がある。
- (47) 大正蔵卷 2, p. 235c-p. 236b.
- (48) 大正蔵卷 2, p. 430c-p. 431b. この『別訳雑阿含経』には、他のパーリ本や『雑阿含経』926経、『菩薩地』所引の経文と比較して、経の要点でもある、どうして地等に依って静慮しないかについての世尊の説明に異なりが見られる。すなわち、「若有比丘。深修禪定。觀彼大地悉皆虛偽。都不見有真實地想。水火風種及四無色比世他世日月星辰識知見聞推求覺觀心意境界及以於彼智不及處。亦復如是。皆悉虛偽。無有實法。但以假號。因緣和合。有種種名。觀斯空寂。不見有法及以非法。」(p. 431a.)。cf. 『思惟略要法』（諸法実相観法）大正蔵卷15, p. 300a.
- (49) 今、パーリ本で対応箇所を示せば、p. 324, l. 28-p. 325, l. 4 ; p. 325, l. 10-18 ; p. 325, l. 24-p. 326, l. 19. なお、『菩薩地』に引用の偈（cf. 註(45)）は、パーリ本には3回（pp. 325-326）現われるが、その C pada に3回とも tenābhijānāma とあるのは、BBh. の te nābhijānīmaḥ によって、te nābhijānāma と分書するのが正しい。同偈は Saṃyutta-Nikāya にも現われるが、南伝14, p. 146 の註(3)にはシャム本により上のように改められているのは当を得ている。
- (50) 註(46)に挙げた類似の経ではいずれも対告衆が、Sandha ではなく、阿難あるいは多数の比丘となっている。また、説者も世尊でなく舍利弗の場合がある（Ānisaṃsa-Vagga VII, Nissaya-V<sup>o</sup>VIII, Anussati-V<sup>o</sup>XXI）が、これは混乱というよりもむしろその教説が舍利弗などの弟子にも充分徹底して実践されていた事実を示すものと考えられる。
- (51) この未調馬と良馬の譬喩も唯一この経にあるのみで、註(46)に挙げた経には無い。
- (52) この他に、『菩薩地』に引用の āgama 及び『雑阿含経』926経では、「日・月（二つ）」、『別訳雑阿含経』151経では「日月星辰」が挙げられている。
- (53) 「しかも静慮する (jhāyati ca pana)」の句は、『菩薩地』では引用されていないが、註(46)に挙げたいずれの経にも存する（ただし「しかも想を有している (saññī ca pana assa)」）。
- (54) 註(46)に挙げた Ānisaṃsa-Vagga VII を除くいずれの経にも、『菩薩地』所引の āgama や Nissaya-Vagga X に見られるどうして<一切に依って静慮しないでもしかも静慮する>という静慮がなされるのかについての世尊の説明<一切において一切の想は消滅している〔除遣されている〕>は存在しない。そのかわり、その答

えとして「比丘はこのような想を有している。すなわち、これは真実だ、これは勝れている。この、一切行 (saṅkhāra) の止 (samatha)、一切の依り所の放棄、渴愛の滅尽、離貪、滅が、涅槃だというのは。」これはそのまま離貪あるいは滅尽想の内容をなしている (cf. *Āṅguttara-Nikāya V*, pp. 110f; 南伝22上 pp. 355f)。Āṅgisamsa-Vagga VII では、上記の答えと異なり、阿難の問いに対する舍利弗の答えとして、「bhava (ここでは恐らく想念の生起の意味と考えられる) の滅は涅槃である。bhava の滅は涅槃である。と、友よ、実に私に一方で想が起り、他方で想が滅する。…… (後略) ……」 (AN. V, p. 9, ll. 24ff) とある。

なお、『瑜伽論』三摩呬多地にも『菩薩地』所引の āgama や上記関連の經に関連する文句が見出される。

「眼も有り、諸色も有り及至意や諸法も有るが、しかし比丘は、これら諸法の有に對して有るがままには分別せず、想の有るがままにも知覚せず、想の無い場合は言うまでもない、と (世尊によって) 説かれるのはどうしてか。ここに比丘が初靜慮を成就して住するとき、それゆえ眼及至諸法を破壊することによって制伏する。彼は、眼に眼の想を有することなく、しかも想を有する。(及至) 諸法に諸法の想を有することなく、しかも想を有する。どうして想を有するのか。眼等に苦や集や病等を作意し、それゆえ、それら諸法を自相として分別しない。…… (後略) ……」 (Tib., D, tshi 155b7-156a5; 大正藏卷30, p. 343a)

- 55) BBh, 荻原本 p. 50, ll. 9-14; Dutt 本 p. 34, ll. 12; Tib., D, wi 28a4ff; 大正藏卷30, p. 489b. 荻原本 1.10 の sā の次に Dutt 本では pṛthivyaḍisaṃjñe-tyucyate. sā punaḥ saṃjñā の句がある。Tib. も同様。今はこれに従う。引用文中で注意されるのは、vibhūta, vibhava の語である。vibhava はここでは prahāṇa や tyāga と同義にみなされているところから、vibhāvanā (除遣) を意味すると考えられる。したがって vibhūta も vibhāvita と同義とみてよい。因みに Tib. も vibhūta=bsal ba, vibhava=bsal である。漢訳もいずれにも「除遣」の語が当てられている。『菩薩地持經』にも「除」とある。
- 56) BBh, 荻原本 p. 394, l. 20-p. 396, l. 18; Dutt 本 p. 272, l. 12-p. 273; Tib., D, wi 202 b3ff; 大正藏卷30, p. 571b-p. 572a. 荻原本 p. 396, l. 10 の avasthā は、Dutt 本には無い。今 Dutt 本に従う。
- 57) BBh, 荻原本 p. 396, l. 18-p. 397; Dutt 本 p. 273, l. 18-p. 274; Tib., D, wi 203 b3ff; 大正藏卷30, p. 572a. 荻原本 p. 396, l. 18 の jñānā は Dutt 本の jñāna が正しい。同じく 1.18 の -gotrāc については諸本一致するが、今は文脈上 -gocarāc と訂正する。cf. Mahāyānasūtrālamkāra, p. 58, l. 2: samādhi-gocara 等の用例。
- 58) 想の除遣を支えているのは、名・想と事は互いに客 (āgantuka) であるとの想をなすことにある。想は想によって除かれることについてはすでに經の中に「しか

も静慮する」あるいは「しかも想を有している」と言及されていた (cf. 註53, 54)。名・想と事の相互客性を洞察する観法は、四尋思 (paryeṣaṇā) と呼ばれる (四尋思によって生ずる智が四如实智)。『菩薩地』では、その四尋思・四如实智は、勝解行地に始まる一切の地における菩薩の重要な菩提分行 (bodhipakṣyācaryā) とされて、『菩薩地』の実践の核となっている (cf. 上掲拙稿 (本稿註9)) p. 36〔4〕)。想の除遣と四尋思・四如实智は表裏一体をなすものであることが知られよう。

- (59) Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga, ed. by K. Shukla, p. 395, l. 2-p. 396, l. 20 (—p. 398, l. 6) ; 大正蔵巻30, pp. 456c-457a.
- (60) cf. ŚBh, p. 363, ll. 14f (大正蔵巻30, p. 450c) : 「九種心住における (心一境性 [cittaikāgratā]) が、止 (śamatha) に属するものでもある。さらに、四種の智慧の基礎における (心一境性) , それが観 (vipaśyanā) に属するものである。」。
- 九種心住の内容については、上記の引用に引続き詳説される (ŚBh, p. 363, l. 17-p. 366) , この他 ŚBh, p. 194, l. 21-p. 195 には、止 (śamatha) の所縁としての無分別影像 (nirvikalpa-pratibimba) との関連で九種心住に言及される。
- (61) ŚBh, p. 397, l. 1ff.
- (62) ŚBh, p. 193, l. 7-p. 195.
- (63) Saṃdhanirmocana Sūtra, L'explication des Mystères, Texte Tibétain Édité et Traduit, par É. Lamotte, p. 106, § 26 ; 大正蔵巻16, p. 700c.
- (64) *Ibid.*, pp. 107f, § 29. この空性による相の除遣は『声聞地』に言う五種の除遣の中「対治作意による」除遣に相当すると見られる。cf. 本稿註59。
- (65) *Ibid.*, p. 109, § 30. この記述から、相の除遣が、先に見た『声聞地』と同様止 (śamatha) に関わる実践であることが知られる。
- (66) *Ibid.*, pp. 115f, § 36-3. この楔の譬喩は、『瑜伽論摂決択分』修所成慧地に、十六種の修 (bhāvanā) が列挙される中の「除去修」 (vibhāvanā-bhāvanā) の説明中にも見出される (大正蔵巻30, p. 669a)。これと同じ説明の仕方が『顕揚聖教論』成宗品第六之余における、十八種の修の中の「除遣修」の説明に見られる (大正蔵巻31, p. 556c) 。
- (67) 影像 (pratibimba) が心 (= 所依) に異ならないことについては、同じく分別瑜伽品に説かれている。*ibid.*, pp. 90f, § 6-8.
- (68) MSA, XIX, 50.
- (69) La somme du grand véhicule d'Asaṅga (Mahāyānasamgraha), par É. Lamotte, Tome II, p. 51, ll. 9ff ; 大正蔵巻31, p. 350c.
- (70) Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, ed. by P. L. Vaidya, p. 176, ll. 13-21.
- (71) 伝統的な空・無相・無願の三三昧についてもその現証は退けられている。善巧方

- 便を欠けば、実際 (bhūtaḥ) を現証して、仏地には入らず声聞地に入ってしまう (cf. *ibid.*, p. 155, ll.10ff)。善巧方便により、空性・無相・無願を熟知しても現証することはない (cf. *ibid.*, pp. 183ff 第20章)。cf. 『摩訶般若波羅蜜經』大正藏卷8, p.336b; pp. 350a-351. (不証品)。ところで、般若經類の中で、「空」の語が一度も使用されない『金剛般若經』は異質的な存在とされているが、除遣に関しても『八千頌般若』等との異質性が証される。この經では、例えば、「菩薩大士によって一切の想 (saṃjñā) が捨てられて (vivarjayitvā) 無上正等菩提に心が発起されるべきである。」(Vajracchedikā Prajñāparamitā, Serie Orientale Roma XIII, ed. by E. Conze, p.41, ll.18ff)。この他、想を起こさない、想を離れている、ことがしばしば強調され、この經の基調にさえなっている。cf. *ibid.*, p. 29, ll.5ff; p.29. ll.12ff; p. 30, ll.3ff; p. 31, ll.14ff; p. 40, l.9ff [§14c] etc. なお、玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第六分(『勝天王般若波羅蜜經』)には内外相の(除)遣が見られる(大正藏卷7, p. 935a)が後世に属する。
- (72) 『小空經』では、比丘が、まず村の想 (sañña) を作意せず、住民の想を作意せず、ただ林の想によって作意する場合、村や住民の想による煩いはなく、ただ林の想による煩いがある。その時、想に関わる (saññāgata) (自身) は、村の想や住民の想の点で空であるが、ただ林の想の点で空ではないと知って、さらに、彼は、住民の想や林の想を作意せず、ただ大地の想によって作意する場合、住民や林の想による煩いはなく、ただ大地の想による煩いがある。その時、想に関わる (自身) は住民の想や林の想の点で空であるが、ただ大地の想の点で空ではないと知って、林や大地の想を作意せず、ただ空無辺処想によって作意する。というようにして次々に新たな想によって作意をなして、それまでそのために煩いとなっていたところの想を次々に無くしていくことが説かれており、ここでの空観は、ただ無いものを無い (有るものを有る) と見るのであって、何か(A)を(B)の点で空であると見てその(A)に関する執着を離れる意味での空観ではない。そのために煩いとなっていたところの林の想が、新たな大地の想による作意によって除かれる。次々に新たな想の作意によって前の想と煩いを捨てていくところに『小空經』の空観の実質がある。その意味で『小空經』の空観も本質的にはまさしく想の除遣であると言える。その場合の除遣の方法は、すでに本文で触れた『声聞地』に示された五種の除遣では、「その他の作意による」除遣に相当すると見てよい。
- (73) ただし、『金剛般若經』は多分に異質的であることは注意を要する。cf. 註(71)。
- (74) 般若波羅蜜の強調、般若經類の在家性等とも関連する。慧解脱の重視は、般若經系では「定 (samādhi) 無減」の除かれた十八不共仏法の説かれることにも伺われる。cf. 宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』pp. 296ff (水野論文)。また、それは禪定 (dhyāna) 波羅蜜の性格にも伺われる。cf. 貞包哲朗「大智度論における禪定」(佐賀龍谷学会紀要6) pp. 35ff。

{APPENDIX}  
CONCORDANCE  
OF THE  
SANSKRIT ÉDITION AND TWO MANUSCRIPTS  
OF THE  
MAHĀYĀNASŪTRĀLAMKĀRA

---

Abbreviations

- Lévi Éd. : Mahāyāna-Sūtrālamkāra, édité et traduit  
par Sylvain Lévi, Tome I. — Texte, Paris, 1907.
- N. 3-291 : Nepalese Sanskrit Manuscript—National Archives Nepal,  
C.No. 3-291. (Bṛhatsūcīpatram II, kramāṅkaḥ ṭṛ 291)
- N. 4-6 : Nepalese Sanskrit Manuscript—National Archives Nepal,  
C.No. 4-6. (Bṛhatsūcīpatram II, kramāṅkaḥ ca 20)

Lévi Éd. (Chapter) Page	N. 3-291 <sup>(1)</sup> (132 folios)	N. 4-6 <sup>(2)</sup> (126 folios)
(I)	(1 a 1)	(1 a 1)
1	1 a 1	1 a 1
2	1 b 1	1 a 8
3	2 a 5	2 a 1
4	3 a 3	2 b 5
5	4 a 3	3 a 9
6	4 b 5	4 a 2
7	5 b 4	4 b 6
8	6 b 2	5 b 1
(II)	(7 a 2)	(5 b 9)
9	7 a 4	6 a 2
10	10 a 1	8 a 7
(III)	(10 a 3)	(8 b 1)
11	10 b 2	8 b 8
12	11 a 6	9 b 2
13	12 a 4	10 a 6
(IV)	(12 b 4)	(10 b 5)
14	12 b 6	10 b 7
15	13 b 4	11 b 1
16	14 b 4	12 a 6
17	15 b 4	13 a 5
18	16 a 6	13 b 7
19	17 a 5	14 b 3
(V)	(17 b 3)	(14 b 7)
20	18 a 2	15 a 5
21	19 a 2	16 a 1
22	19 b 4	16 b 4
(VI)	(20 a 2)	(16 b 9)
23	20 b 2	17 a 7
24	21 b 1	18 a 2
(VII)	(22 b 2)	(18 b 8)
25	22 b 2	18 b 8
26	23 a 4	19 b 1

27	21 a 1	20 a 3
(VIII)	(24 b 2)	(20 b 3)
28	24 b 3	20 b 4
29	25 b 2	21 a 7
30	26 b 1	22 a 2
31	27 a 5	22 b 5
32	28 a 4	23 a 9
33	29 a 3	24 a 4
(IX)	(29 b 2)	(24 b 1)
34	29 b 6	24 b 6
35	30 b 3	25 b 1
36	31 a 6	26 a 5
37	32 a 5	27 a 1
38	33 a 1	27 b 3
39	33 b 4	28 a 5
40	34 b 1	28 b 5
41	35 a 4	29 a 9
42	35 b 6	30 a 1
43	36 b 2	30 b 1
44	37 a 3	31 a 2
45	37 b 4	31 b 3
46	38 a 5	32 a 5
47	39 a 1	32 b 8
48	39 b 3	33 b 1
49	40 b 1	34 a 2
(X)	(41 b 1)	(34 b 4)
50	41 b 1	34 b 4
51	42 a 2	35 a 3
52	42 b 5	35 b 5
53	43 b 1	36 a 6
(XI)	(43 b 6)	(36 b 2)
54	44 a 4	36 b 7
55	45 a 2	37 b 2
56	45 b 5	38 a 3
57	46 b 3	38 b 7
58	47 b 6	39 b 8
59	48 b 5	40 b 4

60	49 b 2	41 a 5
61	50 a 4	41 b 6
62	51 a 1	42 a 7
63	51 b 4	42 b 9
64	52 b 2	43 b 3
65	53 a 6	44 a 5
66	54 a 6	45 a 1
67	55 a 3	45 b 2
68	55 b 6	46 a 4
69	57 a 1	46 b 9
70	57 b 3	47 b 1
71	58 a 5	48 a 1
72	59 a 5	48 b 5
73	60 a 4	49 a 7
74	61 a 3	50 a 2
75	61 b 6	50 b 2
76	62 b 2	51 a 2
(XII)	(63 b 2)	(51 b 7)
77	63 b 2	51 b 7
78	64 a 5	52 a 9
79	65 a 1	53 a 2
80	65 b 1	53 b 1
81	66 b 5	54 b 1
82	67 b 1	55 a 2
83	68 a 6	55 b 7
84	69 a 6	56 b 3
(XIII)	(69 b 6)	(56 b 8)
85	70 a 3	57 a 2
86	70 b 3	57 b 2
87	71 a 6	58 a 4
88	72 a 2	58 b 5
89	72 b 6	59 a 8
90	73 b 3	60 a 1
(XIV)	(73 b 5)	(60 a 3)
91	74 [73] <sup>(3)</sup> a 4	60 b 7
92	75 [74] a 3	61 b 4
93	75 [74] b 6	62 a 7

94	76〔75〕 b 4	63 a 1
95	77〔76〕 a 6	63 b 3
96	78〔77〕 a 4	64 a 7
97	79〔78〕 a 3	65 a 3
(XV)	(79 b 2)	(65 b 2)
98	79〔78〕 b 3	65 b 4
(XVI)	(80 a 3)	(66 a 4)
99	80〔79〕 a 4	66 a 6
100	80〔79〕 b 5	67 a 2
101	81〔80〕 a 6	67 b 6
102	81〔80〕 b 5	68 a 9
103	82〔81〕 b 2	69 b 1
104	83〔82〕 a 6	70 b 4
105	83〔82〕 b 5	71 a 6
106	84〔83〕 a 5	72 a 2
107	84〔83〕 b 7	72 b 8
108	85〔84〕 a 7	73 b 1
109	85〔84〕 b 6	73 b 8
110	86〔85〕 a 5	74 b 2
111	86〔85〕 b 5	75 a 7
112	87〔86〕 a 6	75 b 9
113	87〔86〕 b 7	76 b 6
114	88〔87〕 a 6	77 a 7
115	89〔88〕 a 1	78 a 3
116	89〔88〕 b 4	79 a 1
117	90〔89〕 a 4	79 b 4
(XVII)	(90 b 4)	(80 a 5)
118	90〔89〕 b 4	80 a 5
119	91〔90〕 a 4	80 b 8
120	91〔90〕 b 5	81 b 2
121	92〔91〕 a 5	82 a 3
122	92〔91〕 b 6	82 b 6
123	93〔92〕 a 6	83 a 8
124	94〔93〕 a 1	84 a 3
125	94〔93〕 b 2	84 b 7
126	95〔94〕 a 4	85 b 2
127	96〔95〕 a 1	86 a 5

128	96 [95] b 2	86 b 7
129	97 [96] a 4	87 a 9
130	97 [96] b 5	88 a 1
131	98 [97] a 6	88 b 3
132	99 [98] a 1	89 a 7
(XVIII)	(99 a 2)	(89 a 9)
133	99 [98] b 2	89 b 9
134	100 [99] a 2	90 a 7
135	100 [99] b 2	90 a 8
136	101 [100] a 2	90 b 8
137	101 [100] b 5	91 b 4
138	102 [101] a 4	92 a 2
139	102 [101] b 4	92 b 3
140	103 [102] a 5	93 a 6
141	103 [102] b 6	93 b 8
142	104 [103] b 2	94 b 5
143	105 [104] a 3	95 a 5
144	105 [104] b 4	95 b 8
145	106 [105] a 3	96 a 8
146	106 [105] b 4	97 a 1
147	107 [106] a 6	97 b 5
148	108 [107] a 2	98 b 1
149	108 [107] b 3	99 a 2
150	109 [108] a 6	99 b 8
151	110 [109] a 3	100 b 6
152	110 [109] b 7	101 b 4
153	111 [110] b 6	102 b 5
154	112 [111] b 3	103 b 2
155	113 [112] b 2	104 b 1
156	114 [113] a 4	105 a 4
157	114 [113] b 4	105 b 6
158	115 [114] a 4	106 a 7
159	115 [114] b 6	106 b 9
160	116 [115] a 4	107 a 9
(XIX)	(116 b 1)	(107 b 4)
161	116 [115] b 4	108 a 1
162	117 [116] a 4	108 b 1
163	117 [116] b 5	109 a 3

164	118 [117] a 6	109 b 5
165	118 [117] b 5	110 a 6
166	119 [118] a 4	110 b 6
167	119 [118] b 6	111 b 1
168	120 [119] a 6	112 a 2
169	121 [120] a 2	112 b 9
170	121 [120] b 3	113 b 4
171	122 [121] a 4	114 a 7
172	122 [121] b 6	115 a 2
173	123 [122] a 6	115 b 2
174	123 [122] b 6	116 a 4
175	124 [123] a 7	116 b 7
(XX-XXI)	(124 b 5)	(117 a 7)
176	124 [123] b 7	117 a 9
177	125 [124] b 1	118 a 3
178	126 [125] a 3	118 b 7
179	126 [125] b 6	119 b 5
180	127 [126] b 1	120 a 8
181	128 [127] a 2	121 a 3
182	128 [127] b 4	121 b 7
183	129 [128] a 3	122 a 6
184	129 [128] b 4	122 b 8
185	130 [129] a 5	123 b 2
186	130 [129] b 5	124 a 4
187	131 [130] a 7	124 b 8
188	132 [131] a 1	125 b 3
189	132 [131] b 2	126 a 5

Notes

- (1) Nevārī script ; 6 lines (folio No.1-79). 7 lines (No.80a—) ; 132 folios (complete) ; the date of copying—samvat 796 (AD.1676).
- (2) Nevārī script ; 9 lines ; 126 folios (complete) ; the date of copying—nepāla samvat 1026 (AD.1906).
- (3) This MS. repeats folio-No. 73 on folio 74 by mistake here, and so after this all original folio numbers indicated in ( ) are not correct.

These two manuscripts used here are the copies from the microfilm collection brought to Germany by Nepal-German Manuscript Preservation

Project. (Reel No. A 114)

I wish to express my gratitude to Prof. Heinz Bechert, Goettingen University, who kindly sent me the precious copies. I should also thank Emeritus Prof. Shoren Ihara, Kyushu University, and Prof. Hirofumi Toda, Tokushima University for much kind help to obtain the manuscripts.